



2023年度入学試験問題

国

語

注

意

- 一 問題冊子は一冊（十八ページ）、解答用紙は一枚です。
- 二 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 三 すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
- 四 解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

次の文章を読んで後の間に答えなさい。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

電車の窓越しに見た桜の花が、うつすらとした青い空を背に鮮やかで、ふと鞆^{かほる}からスマートフォンを取り出して、「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と恋人へメッセージを送る。少しして恋人から、「いやらもじま桜をナガめでいたところだよ。お花見でもしたい日和だね」と返事が来る。私たちは互いに何かを伝え合い、コミュニケーションをする。

コミュニケーションというものの、とりわけ人間特有の形でのコミュニケーションを、話し手が何かを意味し、聞き手がそれを理解する」とで成立する當みと捉える」とにしよう。「意味する」というのは日本語としては馴染みがないかもしぬないが、英語の動詞「mean」に対応するものと考へね」とにする。また、何かを意味したり意味されたことを理解したりすることを行ふの一種として捉える」とにする。つまり、コミュニケーションは意味するという行為と理解するという行為から構成される當みと見られる」とになる。「これが広く「コミュニケーション」と呼ばれるもの全般をホウカツするような十分な記述だと主張するつもりはないが、しかし人間のコミュニケーションというものを直観的に捉えるための手がかりとしてはひとまず満足のいくものだろう。冒頭の例においては、私は話し手として「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と言い、それによつて何かを、例えれば恋人にも桜をぜひ見てほしいと自分が思つてゐるというようなことを意味し、恋人はそれを理解し、次に話し手と聞き手を入れ替えて同じようなことをクリ返し、私たちはコミュニケーションをしている。仮に「コミュニケーション」という言葉を人間以外の動物にも当てはめられるように広く解するならば、「8」の字に躍るミツバチや道標となるフェロモンを残すアリもまた仲間との「コミュニケーション」を取つてゐると言えはするだろう。しかし人間以外の動物にも見られる、こうした振る舞いは、私が恋人に「桜がすっかりきれいに咲いているよ」と語りかけたときのコミュニケーションとは重要な点で異なつてゐる。ミツバチやアリはおそらく自身のそうした振る舞いを意識的に制御できるわけではなく、それゆえ何かを意味するためにそれらを意図的におこなつてゐるわけではない。また仲間のミツバチたちやアリたちもそれらを理解したうえで次の行動を決めてゐるわけである。

それにしても、誰かが何かを意味することは果たしてどう「う」となのだろうか？　まずは誰かが何かを意味するというありふれた行為が、実は不可思議ですぐには理解しがたい、それゆえ哲学的な思考を誘うものであるということを、具体例を挙げながら語つていこう。

ひとつ不可思議さはあるひとが何かを言つて何かを意味するとき、そのひとは単に音を発する以上の何かをしてゐるといふことである。次のような場面を考えてみてほしい。子供が玄関で靴^ヒを脱^ハいでいる。どこかに出かけようとしているのだろう。それに気づいた親が「雨が降つてゐるよ」と声をかける。子供はドアノブを掴^ハもうとしていた手を止め、「わかった。ありがとう」などと言いながら、傘立てから傘を取り、改めてドアを開ける。ありふれた日常の一場面である。だがその実、このエピソードはある不可解な出来事を描き出しているのだ。親が発したのは一見すると「アメガフツテイルヨ」という音声でしかない。だがこの音声そのものが持つ音響的側面をどのように分析したところで、この音声と傘を取るという子供の行動とを結びつけるものは見出せないだろう。そこには何か單なる音響的性質以上のものがある。子供はその何かを容易に理解し、そしてそれに対して応答している。ひとが音声を発することで何かを意味し、相手がそれを理解するとき、ただ音を出し、相手がそれを聴覚的に受け取るという以上の交流が生じてゐるのだ。もちろん、声以外の方法による場合も同様だ。手話で何かを言うときなども、明らかに手の物理的な運動以上の何かが生じている。だがその何かとは結局のところ何なのだろうか？　こうしたことこそが何かを意味するという行為に含まれるものとも根本的な謎だ。ひとが何かを意味するとき、いったい何が起きてゐるというのだろうか？

親の発したのはもちろんただの音ではない、それは日本語の表現なのだ、だから単なる音響的性質以上の何かが生じているのであり、それ以上の不思議などない、そう考えるひともいるかもしれない。だが、言語の意味というものがそもそも謎に満ちて、いることを脇に置いたとしても、こうした考え方では、何かを意味するという行為の実態は捉えきれない。⁽³⁾確かに先の例において親が子供に発した音は、單なる音ではなく、日本語の文の発話となっている。だが、親が何かを意味したことになるのは、親の発したのが日本語の表現であるからでは（少なくともそれだけでは）ないのである。

そのことはふたつの方向から示すことができる。第一に、親の発した「雨が降つているよ」という日本語表現は確かに意味のある文であるが、しかしこの文が持つ意味によってだけではこれを受けて子供が理解した事柄を捉えきることはできない。実際、この日本語文そのものは発話の時点において雨が降つているということを表現しているにすぎない。しかし親が出かけようとしている子供に声をかけたとき、ただそれだけのことが伝えられ、子供に受け取られたわけではない。親は子供が傘を忘れないように気を配つたのであり、また親の発話を受け取った子供はそのことを理解し、傘を手に取つたのである。だが「雨が降つているよ」という日本語文そのものには「傘」などという言葉は出てこず、それゆえこの文自体が傘に関する意味を日本語として担つてゐるわけではない。発話された日本語の文が持つ意味を挙げただけでは、この例で起きている不可解な出来事は説明できないのである。親が意味したのは、用いられた日本語文の意味そのものとは別のことなのだ。

第二に、実は日本語表現を用いることなく同様の例をつくることができる。出かけようとする子供のそばへと親が歩み寄り、無言で手を振つて子供の注意を惹きつけ、そのうえで窓の外を指差したとしよう。その指の先には、雨が降りしきるコウケイ^(オ)が広がつていて、この場合でも子供はやはり「わかった。ありがとう」などと言ひながら傘を手に取つたのである。親はもはや日本語文を発話してさえないが、それでもなお起きている現象に本質的な違いはない。だとすれば、この現象は、用いられた日本語文というものを持ち出すことなく説明され得るようなものであるはずなのだ。

要するに、親子のコミュニケーションの例では、言葉が持つ意味とは次元を異にする、別の種類の意味というものが関与しているのである。この例において、親は「雨が降つているよ」と言うことによつて、子供が傘を持っていくべきであるといつて

を意味した。そして子供はそれを理解して、その助言に従つた。ただしここでの「意味した」は、親が用いた日本語がそうした意味を持つてゐるというのとは異なる意味での「意味した」なのである。冒頭で定めた意味合いにおけるコミュニケーションは、こうした独特な意味の概念が関与するものとして捉えられなければならない。しかし「言葉の意味について語るときの「意味」とは異なる意味での「意味」において、親があることを意味して子供がそれを理解したのだ」などと語るだけでは現象を記述しているだけであつて、現象の説明とはならない。問題は、ここで起きているのは結局のところどういう現象であり、そしてなぜ親が「雨が降つているよ」と言うことで、そのような現象が引き起こされたのかということである。これはつまり、「雨が降つているよ」と言うことで親が何を成し遂げたのか、つまりは「雨が降つているよ」と言うことで何かを意味するとは正確にはどういうことなのかを問わねばならないということだ。単に音やインクの染みといったものを生み出すということでは全くされず、かといって単に有意味な言語表現を用いているということだけでも捉えきれない（しかも言語表現を用いなければならぬわけでもない）、この「意味する」とは何なのか？

子供に「雨が降つているよ」と声をかけることで、子供が傘を持っていくべきであるということを親が意味するとき、親が発した音にも、用いた日本語表現にも、子供や傘に関するメッセージは含まれていないように思える。それにもかかわらず子供はそうした内容を理解する。これはいわば制限つきのテレパシーだ。もちろん一切の言語や身振りを介さずして意志疎通が成し遂げられているわけではないが、少なくとも意味されている内容に明白な対応を持つものは何も介在していないように見える。それにもかかわらず、確かに意志疎通が生じているのである。そしてこうしたことはこの例に限つて起きている特殊な事態ではなく、それどころか私たちの日常のありふれたワーンシーンでしかない。私たちは誰もがちょっとしたテレパシー能力者なのだ。相手が使つた表現にも発した音や作ったインクの染みにもそれ自体としては含まれていないはずの内容を、当たり前のように理解する。また逆に、相手がそうした内容を容易に理解してくれると見込んで、何かを言つたり書いたり何らかの身振りをしたりする。あなたが何かを意味し、私がそれを理解し、私たちがコミュニケーションをするとき、私たちはこのような不可思議で、驚くべき」ことをいつだつて成し遂げてゐるのだ。

問一 傍線部アイウエオのカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二 傍線部①について、「桜がすっかりきれいに咲いているよ」というメッセージには、どのような意味が込められていると考えられるか、本文に即して説明しなさい。

問三 傍線部②について「人間特有の形でのコミュニケーション」とはどのようなコミュニケーションか、人間以外の動物のコミュニケーションと比較しながら、本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問四 傍線部③について、「こうした考え方では、何かを意味するという行為の実態は捉えきれない」という筆者の主張の具体的な根拠となる反例は何か、説明しなさい。

問五 傍線部④について、筆者はなぜ「制限つきのテレパシー」という比喩表現を用いるのか、「制限つきのテレパシー」とはどういう「」とかを説明しながら答えなさい。

「あたし」は、海辺にある「阿部さん」の家へと、クッキーをおみやげに遊びにいっている。以下の文章を読んで、後の間に答えなさい。

阿部さんの家には、阿部さんが三人いる。一人は、女の阿部さん。もう一人は、男の阿部さん。そしてもう一人は子供の阿部さん。三人のうちの誰かに呼びかける時には、「ねえ、女の阿部さん」「あの、男の阿部さん」というふうに言わなければならぬ。阿部さんは、名前といふものが嫌われているのだ。

どうして名前が嫌いになったのかと、いつか女の阿部さんに聞いたことがある。「だって、名前って、なんとなく枷^{かせ}になるじゃない？」

女の阿部さんは答えた。

「枷？」

聞き返すと、女の阿部さんはうなずき。

「ほら、せりなだて、せりなつていう名前じゃながつたら、『うごく』ブレー帽とかかぶらなかつたと思ひ」と言い、あたしがかぶつている抹茶色のブレーのポンポンをわわつた。

「それ、名前と関係ないよ」

「ううん、きつと関係ある」

せりなつて、かわいっぽい名前じやない。だからほら、せりながいつも着てるものだつて、とんがつたハイヒールにしゃらしゃらした生地のワンピースとかスカートとかじやなく、ぼてんとしたチュニックに細いジーンズ足もとはスニーカー、つていう感じなんだよ。女の阿部さんは説明した。

「名前のせいじやなく、あたしがそういう服装が好きだからしてるだけだよ」

「いやいや、そういう服装が好きになつたのも、そもそも野に咲く花っぽい響きの、せりなつていう名前を持つてたからじやないのかなあ」

そう言つて、女の阿部さんは笑つた。たいして本気であたしを説得しようとしているわけではないのだ。

そういふれば、女の阿部さんは、いろんなタイプの服を持つてゐる。今日は、体にぴつたりはりつゝよくなまつ黒いミニのワンピースに、紫色のレギンス、頭には黄色いターバンをべるべる巻きつけてくる。

「それ、何ふうつていうの？」

聞いてみたら、女の阿部さんは少し首をかしげた。

「イングネシア？ か、それとも、アルゼンチン？」

本人も、よくわかつていらないらしい。

女の阿部さんとあたしは、会社の同僚だ。^② 服装の傾向が日にによつてあんまり違つるので、あたしと会うまで、女の阿部さんには同僚の友だちがいなかつたのだという。

「服装つて、友人関係を左右するんだ？」

驚いて聞くと、女の阿部さん（会社では、ただ「阿部さん」と呼んでいるわけだけれど）はうなずいた。

「そうなの。どうもねえ、日本人つて、ある一定の型にはまつてない人間を見ると、不安になつちやうみたい」

確かに、女の阿部さんの服装からは、女の阿部さんがどんな型をもつ人間なのか、さうぱり推し量れない。あだっぽいタイプなのか、遠慮深いタイプなのか、明るいのか、優しいのか、厳しいのか。

「なるほど、服装つて、けつゝ、あぬかも」

「でしょ。名前も、それと同じなの」

名前と服装は、なんだか違う気がするけど。あたしは内心で思つたけれど、口には出さなかつた。ちなみに、女の阿部さんの名前は、

「やめう」ところ。

「ね、なんだかいがにも、やめういほく育ちそな名前でしょ」

女の阿部さんは眞面目な顔で語る。

「やめう」っぽい人間が、いつたいどんな人間なのだが、あたしには見当もつかない。でも、言われてみれば確かに女の阿部さんは、「やめう」とは違う感じがしないでもない。

「子供の阿部さんには、名前、あるの」

「あるよ、だつて名無しじや法律が許してくれないから」

「どんな名前」

「やめう」

子供の阿部さんは、女の阿部さんと男の阿部さんの娘だ。母親と同じ名前の子供か。あたしは田をまるくした。
「考へてねつたんだ、ぐるぐるしだしかやいたから」

女の阿部さんはこやつと笑った。

女の阿部さんは、会社ではめだたない。服装に統一性はないけれど、会社に着てくるのは女の阿部さんの手持ちの服のうち、八九種當なものばかりなので（あたしが女の阿部さんちを訪ねた時に着ていた、れいの紫色のレギンスに黄色いターバン、なんていう類のものは、むろん会社には着てこない）、人の目はぐにひかないのだ。仕事は眞面目で、でもひどく自己主張をすることもなく、飲み会の出席率はだいたい五十ペーセント。

といひが、ある時異変が起きた。

女の阿部さんを、「やめうさん」と呼ぶ女があらわれたのである。

女の阿部さんは、ものすごく不快な顔をした。下を向いて、こゝそり表情を変えただけだったので、久しぶりに名前を呼ばれた女の阿部女はあたしの方に向き直つて同意を求めた。あたしは固まつてただ立つていた。

「やめうっていう名前、好きじやないんです」

女の阿部さんは、女に頼んだ。
「あら、そんな他人行儀なこと言わないでよ。ね、せりなさんだつて、そう思つでしょ」

「下の名前じやなく、姓を呼んでください」

女の阿部さんは、女に頼んだ。

「あら、そんな他人行儀なこと言わないでよ。ね、せりなさんだつて、そう思つでしょ」

女はあたしの方に向き直つて同意を求めた。あたしは固まつてただ立つていた。

「やめうっていう名前、好きじやないんです」

阿部さんは柔らかく続けた。呼ばれたに堅固な主張は持つてゐるが、女の阿部さんは決してこねばつた態度の人間ではないのだ。

「あら、わたしはさゆり、好きよ。注吉永小百合と同じ名前なんて、すてきじやない」

女はくわづのようにてのひらを揺らめかせながら、こゝやかに言つた。女の阿部さんは小さなため息をついた。女は、気づかないやりをした。

あたしたちの会社には、女が多い。そして多くの女たちに肩書が与えられてゐる。女の阿部さんは、係長だ。女の阿部さんを「やめう」と呼ぶ女は、次長である。上司の言葉には、さがらねず。昔からの会社の決まりだ。

「セクハラだつて、訴えてみたら」

あたしは提案したけれど、女の阿部さんは薄く笑うだけだった。いいの。昔から慣れてるから。それに、セクハラは無理だよ。いや、パワハラは？　ますます無理。

なぜ女の阿部さんが下の名前を使うことを嫌いしなくなつたのか、あたしはあらためて不思議に思つようになつた。そもそも、普通に生活していると、下の名前を呼びあう機会なんて、ほとんどないんだし。

「こや、ただのこだわり」

女の阿部さんは言つた。

それがいつたい何のこだわりなのかは、女の阿部さんは説明してくれなかつた。会社生活は、少しずつ^{じゆく}かわがやしていつた。女の阿部さんが名前で呼ばれる、ことを明らかに嫌いでいるのは、じぶん隠してもどきみ出てしまつたし、すると次長はますます依怙地になつて「わゆりさん」と呼び続けるのだった。

なんとなく気がはれないから、フリー・マーケットでいっぱい服を売ろう。

と、女の阿部さんに誘われた。

そんなに売るほど、服持つてないから。と申うと、女の阿部さんは、じやあ、あたしの服売るの手伝つてくれる? と聞いた。フリー・マーケットの日は、雲一つない晴天だつた。女の阿部さんの服だけでなく、男の阿部さんの服も子供の阿部さんの服も、値札をつけてきれいに並べた。服はどんどん売れた。いちばん高いのが五百円で、三十円、なんていう値をつけられたものもあつた。

すべての服がなくなつたのは、まだ午後二時にもならない時刻だつた。

「あー、売れた卖れた」

女の阿部さんはのびをした。小銭を入れた、いつかあたしがおみやげに持つていったクッキーの空き缶を、女の阿部さんは上下に振りした。じやらんじやらんとう、いい音がした。

「何か食べよつか」

女の阿部さんは言い、あたしの答えを聞く前にすたすた歩きだした。やがてやあそばの屋台の前できゅうと立ち止まり、大きな声で「二〇」と注文した。

芝生に座つて、一人でやきそばを食べた。三十円のTシャツを値引きしよひねたおばさんの是非について、あたしたちは喋つた。それから、五百円のニット帽を買って千円札を出し、釣りはいらないといばつたおじさんだつた。

「おじさんの方に、一票」

「いや、おばさんの粘りも、あなどれない」

女の阿部さんが言つた。
「あたし、一回死んだことがあるんだ」
さよひとして、あたしはほんの少し目をそらした。上を向いたままの女の阿部さんが、目をそらしたいとに気がついていないといふと思ひながら。

「事故で、脳波が停止したの。でも、ほんの少ししたらまた、脳波、出てきたんだい」
女の阿部さんは、ゆっくうと喋りはじめた。
いつたい脳波といつものは、そんなに簡単に「出たり入つたり」するものなんだろうかと驚きながらも、あたしは阿部さんの言葉にじつと耳をすませた。

「仮死状態になつたんだけど、また生き返つたらしいんだ」

そつなんんだ。おつかなびつくり、あたしは答える。
女の阿部さんは、十五歳の時、車の前に飛び出した友だちをかばおうと車道に走り出で、そのままはねられたのだった。意識不明の重体が一週間続き、やがて脳波は停止した。けれど、「臨終です」という医者の声に、お父さんとお母さんが号泣はじめたといひで、ふたたび脳波計に波があらわれたのだといつ。

「よかっただね」
「うん。でもあたし、その前の記憶を、全部なくしちやつたの」
以来、女の阿部さんは、自分が「待田さゆり（待田は、女の阿部さんの結婚前の姓だそうだ）」どころの人間なのだと、実感を持ってないまま、生きてきた。

^③男の阿部さんと結婚して、はじめて女の阿部さんは、自分が「阿部」という存在をちゃんと同化できた、と感じた。

「だから、女の阿部さんなのか」

「え？」

「やあ、いつ呼はれても、他人みたいな感じなんだね」

「そ、なんか、やゆり、っていう実体と自分とが、半分以上ずれてるよ」

「やめや」

「あたしは聞いた。」

「だからって、子供の阿部さんに『やゆり』って名付ける、適当すぎるない？」

女の阿部さんは、あはははは、と笑った。今日の阿部さんの服装は、羊みたいに毛いぬ、ハーフのコーンパンツなど、七色の縞のタイツ、それに黄色いブーツだ。

「黄色い小物が、好きなの？」

あたしは聞いてみた。女の阿部さんはうなずいた。病院の天井が、黄色だったの。ひよいの黄色。だから、黄色はあたしのラッキーカラー。

女の阿部さんは立ち上がりた。青のりを歯にくいつけたまま、女の阿部さんは海辺の家へと帰つていった。

「一。

(川上弘美「ラッキーカラーは黄」による)

注 吉永小百合＝昭和三〇年代以降の映画界で活躍する女優。

問一 傍線部①は、「女の阿部さん」のどのような気持ちを表現したものか、比喩に即して説明しなさい。

問二 傍線部②について、なぜ「女の阿部さん」はそのような「服装の傾向」であるのか、説明しなさい。

問三 傍線部③について、「自分が「阿部」という存在ときわんど同化できた」とはどういうことか、本文の内容をふまえて説明しなさい。

問四 一重傍線部について、「女の阿部さん」の「「だわ」」とは、どのような「「だわ」」であったか、説明しなさい。

問題三

次の文章は、「この男」が「上達部めきたる人のむすめ」との間で、数回、文をやりとりしたが、ある時から返事が来なくなつたことを不審に思い、事情に詳しいこの「むすめ」の家に仕える別の女房に尋ねたところ、その理由が分かつたという話である。これを読んで、後の間に答えなさい。

また、「この男」もののたよりに、いとさだかにはあらず、なまほきたるものから、さすがに文は取り伝へつべき人をたよりにして、上達部めきたる人のむすめよばひけるを、もしいかならむと思ひつつ見けるを、男、うれしと思ひて、いひかはしけること一度三度ばかりして、のちのちはせざりければ、

身を燃やすことぞわりなき梳く藻火の煙も雲となるを頼みて

とあれど、さらに返しなし。されば、かの男、文伝へける人にあひて、「いかなることを聞こしめしたるにかあらむ」などいひければ、「なでゑることにもあらじ。まもりかしづきたてまつりたまへば」といひければ、さもいそはあらめと思ひて、「さらば、よきをりをりに奉らせたまへ」。さて、文に思ひけることどものかぎり多う書いて、じらせたりければ、「させむ」とて持ていきけれど、また、その返り^②ともせざりければ、男、また、いひやる。

②はき捨つる庭の屑とやつもるらむ見る人もなきわが言の葉は

といひやれど、返り^①ともせざりければ、また、

注一 秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな

かくのみいへど、返り^①とさらにせず。あやしさに、いかなるぞ、さだかなるたよりのなきかとて、もとめける。この、文伝ふる人は、もとよりすこしほきたるやうにおぼえければ、とかうもいはで、ねむぐろに心に入れて、尋ねければ、「しとものはかなきたよりにつけてありしことななり。その人はさだかにも知らじ。おのらも見しかば、はじめわたりの返り^①とはすめりし。注三 その人の、ものへいましぬめりしかば、心には思ひながら、えせぬぞ。注四 みづからは手もいと悪し、歌はた知らず。あたら、こと序詞に用いられる。

注五 なまほきたるものから=なんとなく、心が鈍くぼんやりしているのだが、の意。

注六 秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみとも=「秋風のうち吹き返す葛の葉の」までが「うら」をいうための序詞。「うらみ」は「裏見」と「恨み」の掛詞。葛の葉は、風に吹き返されやすく葉の裏が白くて目立つところから「うら」の枕詞や序詞に用いられる。

（『平中物語』による）

注一 なまほきたるものから=なんとなく、心が鈍くぼんやりしているのだが、の意。

注二 秋風のうち吹き返す葛の葉のうらみとも=「秋風のうち吹き返す葛の葉の」までが「うら」をいうための序詞。「うらみ」は「裏見」と「恨み」の掛詞。葛の葉は、風に吹き返されやすく葉の裏が白くて目立つところから「うら」の枕詞や序詞に用いられる。

注三 おのら=自称の代名詞。

注四 ものへいましぬめりしかば=よそへ行かれたらしくて、の意。

注五 はた=…もまた。

注六 家刀自=一家の主婦。

問一 傍線部アイウエを現代語訳しなさい。

問二 傍線部①について、「文伝へける人」の発言をうけて、「男」はどうに現状を理解したか、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部②の和歌を現代語訳しなさい。

問四 「上達部めきたる人のむすめ」からの返事が来なくなつた理由について、本文の内容を踏まえて、わかりやすく説明しなさい。

問題 四

次の文章は、前漢時代の疏廣といいう人物が、官職を退いた後、郷里に帰つて余生を過ごしている場面を記したものである。これを読んで、後の間に答えなさい。(出題の都合上、本文や訓点を省略した所がある。)

廣既歸郷里、日令家共具設酒食、請族人故旧賓客、与相娛。樂數問其家金余尚有幾所、趣壳以共具。^ス居歲余、廣子孫窃謂下其昆弟老人廣所愛信者上曰、「今日飲食費且盡。^ス宣下徒丈人所、^{シクリ}^{注三}勸說君買田宅。^ヲ老人即以間暇時為廣言此計。廣曰、「吾豈老詩不念子孫哉。顧自有旧田廬。^ノ而^テ六^{注六}今復增益之以為贏余、但教子孫勤力其中、足以共衣食、與凡人齊。^{ヒトシカラ}而多財、則損其志、愚而多財、則益其過。且夫富者、衆人之怨也。吾既亡以教化子孫、不欲下益其過而生怨。又此金者、聖主亦可乎。」於是族人說服。

(『漢書』による)

- 注一 共具=用意する。
- 注二 昆弟=兄弟。
- 注三 従丈人所=あなた方から。
- 注四 間暇=ひま。いとま。
- 注五 老詩=おいばれる。耄碌する。
- 注六 田廬=田畠と家屋。
- 注七 賸余=あまり。余分。
- 注八 惰墮=怠惰。
- 注九 聖主=皇帝。疏廣の退職時に黄金を贈った。
- 注十 郡党宗族=同郷・一族の人々。
- 注十一 説服=よろこんで納得した。説は悦と同じ。

問一 二重傍線部アイウエの読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で書きなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問二 傍線部①を現代語訳しなさい。

問三 傍線部②について、疏広の子孫はなぜこのように勧めようとしたのか、説明しなさい。

問四 傍線部③をすべて平仮名で書き下し文にしなさい。現代仮名遣いを用いてもかまわない。

問五 傍線部④について、疏広はどういうことを「不亦可乎」と言っているのか、本文に即して説明しなさい。